

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2013 夏号

63

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 平井Ⅱ遺跡の発掘調査



特集 平井Ⅱ遺跡の発掘調査



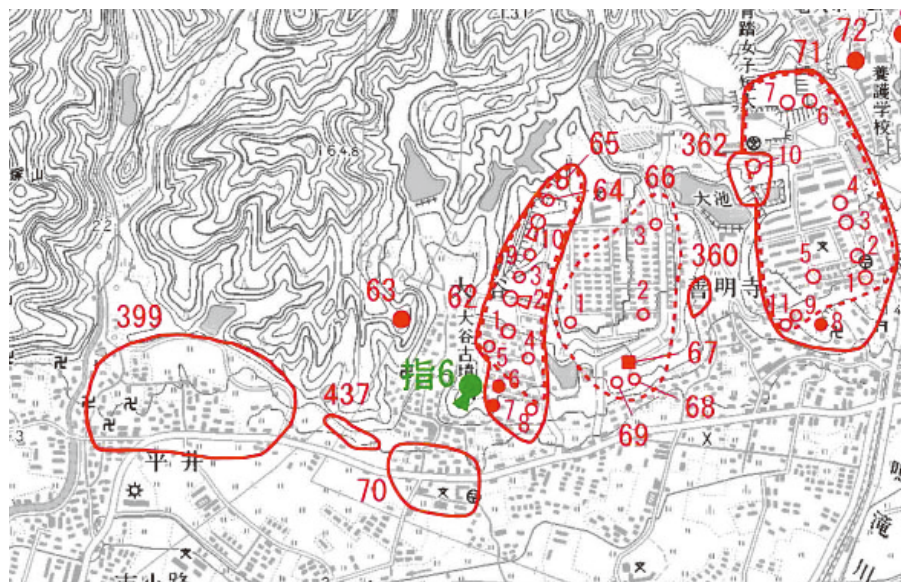
1区遠景（西から）

はじめに

今回調査を実施した平井Ⅱ遺跡は、一般国道26号第二阪和国道の建設工事の際に、土器などの出土が確認されたことから、埋蔵文化財包蔵地として認定された新規の遺跡です。

平井Ⅱ遺跡（437）は、現在の紀ノ川河口から約5km遡った右岸（北岸）の丘陵裾部に位置します。周辺の地形は、和泉山脈から南に派生する丘陵地と丘陵間の谷部を南流する小河川によって形成された扇状地及び紀ノ川の河川堆積による沖積地に分ける事ができます。

周辺には、調査地北東の丘陵上に築かれ、馬冑や馬甲などが出土し朝鮮半島との深い関わりを示す遺物が出土する大谷古墳（指6）を含む晒山古墳群（62・64・65）



遺跡の位置

や雨が谷古墳群（66）、扇状地に位置し多量の初期須恵器（陶質土器）が出土し注目を集めた楠見遺跡（70）、平井Ⅱ遺跡同様に丘陵裾部にある平井遺跡（399）などがあります。

発掘調査は、平成24年6月から12月にか

けて第1次調査（1区）を、平成25年1月
から2月にかけて第2次調査（2・3区）
を実施しました。1区と2区の調査前の現
況は水田で、面積は、1区が約1,060
㎡、2区は約290㎡です。3区的面積は
約380㎡で、民家が建てられていました。



1区

近世の土坑や中世のピット、古墳時代の
たてあないこう 竪穴遺構（土坑）などを検出しました。

近世の土坑 円形の土坑で、全体で20基
前後あり、調査区の中央部に集中して掘削
されています。規模は直径1.4～1.6m前後、
深さは20～30cm程度のものが多く、18世紀

代の陶磁器類や瓦が出土しています。土坑
の一つには、木製の桶おけが残っていました。
桶の内側はほぼ円形で、直径は約1.1m、深
さ約15cm分が残っていました。桶の底板は
最大5.5cmと厚く、4枚の板材を、両端を尖
らせた木釘で連結し一枚の板にしていま
す。

中世のピット 平面の形はほぼ円形で、
直径は30cm前後です。須恵器の捏ね鉢ねこと
鉢はち



上段：1区全景（航空写真 上が北）

中段：1区古墳時代竪穴遺構（南西から）

下段・左上：1区近世土坑（南から）／下段・右上：1区中世ピット（南東から）

下段・左下：1区出土初期須恵器／下段・右下：1区出土初期須恵器



瓦器碗の完形品が出土するものや、瓦器碗の完形品2点が出土しているものもあります。

古墳時代の竪穴遺構 調査区の東端部で検出しました。遺物は、古墳時代の土師器のほか、初期須恵器が多数出土しています。須恵器の器種には、器台・高杯・壺などがあり、器台には、波状紋・組紐紋・斜線紋・竹管紋などの多彩な紋様が施されています。なお、包含層からは、初期須恵器のほか、埴輪の破片も多数出土しています。



2区

2区には遺構面が2面あります。

第1遺構面で検出した遺構には、溝と土坑があります。溝はいずれも素掘りで、検出された箇所により、調査区の東と西及び北の3つのグループに分けることができます。東側の溝群は、幅が20cm前後で、深さは5cm以内のものが多く、約50cmの間隔で



上段：2区第1遺構面全景（南東から）

中段：2区第2遺構面全景（北西から）

下段：2区古墳時代土坑（東から）

掘削されています。一方、西側の溝群は、幅20～30cmと東側の溝群に比べてやや広く、掘削の間隔は20～40cmとばらつきがあります。遺物は、中世の瓦器や土師器のほか、初期須恵器を含む古墳時代の須恵器や埴輪片も出土しています。

第2遺構面での検出遺構には、土坑・溝・ピットがあります。土坑は調査区の中央部から西側の範囲でのみ検出されます。平面形は円形及び楕円形で、深さは、残りの良



2区出土初期須恵器

いものでは20cm前後残っていますが、多くは5〜10cmしかありません。遺物は、古墳時代の須恵器及び土師器が出土しています。須恵器には、乳状の突起を貼り付けた甕または壺の破片が含まれています。

3区

調査前の現況が宅地（民家）であったことから、建物の建築や撤去の際に重機などによる広い範囲での掘削・攪乱が多く、遺構が確認できたのは調査区北（東）側の約1/3の範囲に限られます。検出した遺構には、溝・土坑・ピットがあります。



3区全景（北から）

まとめ

1区で検出した古墳時代の竪穴遺構は、主柱穴やカマドまたはそれに類似する施設が調査区内では検出されなかったことや床面に凹凸があることから、住居である可能性は少ないと考えています。

中世の遺構は、調査地のほぼ全域で検出しています。瓦器碗が完形で出土しているピットは地鎮に関連する遺構と考えられ

ますが、周辺で建物を確認することはできませんでした。

2区の第1遺構面及び3区で検出した溝は、中世以降の水田耕作に伴う遺構と考えられます。水田は、2区で確認された盛土の存在などから、複数の時期に区画の拡幅などの改変が行われていたようです。

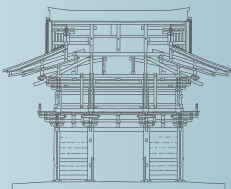
今回の調査では、包含層出土分も含め多数の初期須恵器が出土しています。組紐紋や竹管紋などを施し、楠見遺跡出土の初期須恵器（陶質土器）と共通する点も少なくありません。

また、1区出土の初期須恵器は、器台や高杯が多く、施紋された破片が多いのに対し、2区出土の初期須恵器の殆どが甕や壺の破片であるなどの違いがあります。

その他、古墳時代の注目すべき遺物に埴輪の出土があります。円筒埴輪と形象埴輪があり、調査地周辺の古墳の存在を窺わせる遺物です。

中世の瓦器は、1区では、完形品も複数出土し、時期が12世紀前半代であるのに対し、2区出土の瓦器は、細片が多く時期が13世紀中葉以降であるなどの相違点がみられます。

（井石 好裕）



新現場紹介

丹生都比売神社

本殿保存修理工事

平成二五年一月より、重要文化財（建造物）丹生都比売神社本殿（四棟）の保存修理工事が始まりました。今回の修理では主に、三五年前に葺き替えられ耐用年数に達していた^{ひわだ}桧皮屋根の全面葺き替えと、同じく破損が進んでいる彩色の修理を行います。また、修理に先立って行った調査により、第二殿の軸組が大きく歪んでいることが判り、こ

のまま放置するのは危険と判断されたため、第二殿に関して軸組の修正及び補強工事も行うことに



建て起こしを行っている第二殿

なりました。

工期は二四ヶ月で、建物が四棟あるため一年で二棟ずつ修理を行います。しかし、丹生都比売神社が所在する天野の地は標高約四五〇メートルの盆地に位置し、冬季は寒冷な気候のため、凍結の恐れがある時期には塗装工事で用いる伝統的な材料、「^{にかわ}膠」を使用出来ないことから、実質の工期はそれぞれ八か月程度しかありません。さらに、修理を行う際には祀られている神様にお移り頂く必要があるため、準備期間などを考えると決して余裕のある工期とは言えません。

気候が良くなった三月頃から第一殿と第二殿を覆う素屋根を建設し、桧皮屋根の解体に引き続いて第二殿の軸組修正と、第一殿の塗装工事に取り掛かりました。第二殿は不動沈下と柱の傾斜を修正するため、まずは柱をジャッキアップして鉛板を敷き込んで高さを直してから、軸部を突っ張って柱の傾斜を矯正しました。また、そのまま

では再びこ

けてしまうため、床下の見えない部分に筋交いを設置して軸組の補強を行いました。

塗装工事



剥落止めの施工中

は、最初に剥落が進んでいる彩色部分の顔料（絵具）に、これ以上剥がれないように膠を染み込ませて接着する「剥落止め」という作業を行います。次に、退色や劣化の進んだ赤色塗料を塗りなおすためにケレンと呼ばれる塗料の掻き落とし作業があり、現在は第一殿でこの作業を行っています。今後は塗装工事と屋根葺きを行い、十一月頃には素屋根も解体されて第一殿と第二殿の修理が完成した姿をお披露目できる予定です。（結城啓司）

社寺建築や古民家などの伝統的な建物と、現代の木造建物を見比べると、柱の建て方に大きなちがいがあることがわかります。今の建物では、足もとにコンクリートなどで造られた水平な基礎が廻らされ、土台や柱などの木材が金具などで固定されていますが、伝統的な建物の多くでは、土間に据えられた自然石の上に直接柱が載っています。その工法は石場建てと呼ばれています。

その石（礎石）は河原で見かけるような玉石であったり、角ばった青石などさまざまです。山あいの古民家などで見かけると、野趣にあふれいかにもといった感じがしますが、和歌山城下や高野山といった洗練された建築文化を誇る地域でも、同じような石が用いられています。西欧など石造建築の文化が発達した地域と違い、木造中心の日本では石を加工する技術が進歩しなかったのでしょうか。実は飛鳥時代や奈良時代の寺院建築などでは、礎石は美しく加工されています。このことから自然石が用いられていることが単に技術が未熟であったからではないと理解できます。石場建ての柱をばらしてみると、その底は石の凹凸にあわせて丁寧加工され、決して素朴な納まりではないこともわかるのです。

無理やり固定するのではなく、手で優しく包み込むように柱が礎石と接する様子は、日本人ならではの建築のとらえ方を語ります。

伝統的な建物が地震や台風柔軟に耐えてきたのは、このような細やかな技術の積み重ねの上にあるのかもしれない。

（多井 忠嗣）



桃山時代の禅宗寺院（長楽寺仏殿）
自然石と切石を使い分けている

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

時代区分、あるいは年号というのは、文化史なり政治史を考える上ではきわめて便利なもので、その当時の雰囲気やイメージを象徴的にあらわしてくれるものです。ただ、逆にそのイメージに引張られ、実情を見誤るおそれもあります。

例えば、今年のNHKの大河ドラマで、綾瀬はるか演じる主人公・八重は、いま放映中のドラマを見る限り幕末・維新のイメージですが、実際には明治・大正を生き延び、昭和の空気が残っていた人で、彼女に関しては、写真のみならず動画さえ残っています。人に限らず、意外と古いものが次の時代でも生き延びているものです。

縄文から弥生へという過渡期も一筋縄ではいきませぬ。先年、うちのセンターで調査をし、今年三月まで整理をしていた立野遺跡の成果をみて、つくづくそのことを思い知りました。

あの遺跡は、石包丁が出土していることからすでに稲作がおこなわれていたことは確実です。出土した壺を見ても前期の中段階、紛れもない弥生土器であり、弥生時代の集落跡とするに躊躇はありません。ところが、こと甕に注目するとまったく様相を異にし、縄文土器の系譜をひく突帯土器と呼ばれる頸部に突帯を巡らすタイプのものが主流だし、貯蔵具である壺と煮炊き具である甕や鉢の比率は1対9と、その組成も縄文時代の様相を色濃く残しています。

当たり前のことですが、後世の我々が便宜的に一線を引くのは関係なく、人は連綿と日々の生活を続けていたのでしょうか。

ちなみに筆者は、昭和のど真ん中に生まれ、昭和で育ちましたが、最近この「昭和」のイメージが若い世代からとみにバカにされている傾向があり憤慨に堪えません。

小生の繰り出す駄ジャレやパソコンの操作能力に対して、息子どもは「昭和だなあ」と揶揄しますが、たしかにそこまで言われるとへいせいではない。これも昭和か――。

（村 田 弘）

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2013年夏～2013年秋)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 夏季企画展「木の考古学」 2013年7月13日(土)～9月1日(日)

和歌山県立博物館

- 企画展「未来へ伝えよう私たちの歴史—文化財の魅力発見!—」
2013年7月20日(土)～9月1日(日)
- 特別展「黄河と泰山—中華文明の源と世界遺産—」
2013年9月14日(土)～10月20日(日)

和歌山市立博物館

- 特別展「海人の世界—発掘された海辺のくらし—」 2013年7月20日(土)～9月1日(日)

高野山霊宝館

- 建造物特別公開「国宝・不動堂」 2013年8月27日(火)～8月29日(木)

(公財)和歌山県文化財センター

- 「地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会—」 2013年9月1日(日)13:00～17:00
場所:きのくに志学館(和歌山県立図書館)2階 講義・研修室 入場無料 申込不要(先着80名)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 1区全景(西から)
- 2 特集 平井II遺跡の発掘調査
- 7 きのくに歴史小話「古建築修理の逸話⑤石場建て」
「発掘屋余話②時代の印象」
- 8 催し物案内

風車63 (2013・夏号)

平成25年7月18日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】

〒640-8404 和歌山市湊571-1

TEL 073-433-3843 FAX 073-425-4595
maizou-1@wabunse.or.jp